各火山の５月の活動解説

【北海道地方】

雌阿寒岳［噴火予報（噴火警戒レベル１、活火山であることに留意）］

火山活動は概ね静穏に経過しており、火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は認められない。

一方、ここ数年、地震増加、山体浅部の熱活動の活発化を示す96-1火口の噴煙量増加や全磁力[1)]の変化などがみられていることから、今後の火山活動の推移に留意が必要である。

十勝岳［噴火予報（噴火警戒レベル１、活火山であることに留意）］

火山活動は概ね静穏に経過しており、火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は認められない。

一方、ここ数年、山体浅部の膨張、大正火口の噴煙量増加、地震増加、火山性微動の発生、発光現象及び地熱域[2)]の拡大などを確認しており、長期的にみると十勝岳の火山活動は高まる傾向にあるので、今後の火山活動の推移に注意が必要である。

樽前山［噴火予報（噴火警戒レベル１、活火山であることに留意）］

火山活動は概ね静穏に経過しており、火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は認められない。

17 日から 19 日にかけて実施した現地調査では、Ａ火口、Ｂ噴気孔群、Ｈ亀裂東壁で高温状態が継続していた。

山頂溶岩ドーム周辺では、1999 年以降、高温の状態が続いているので、突発的な火山ガス等の噴出に注意が必要である。

なお、以下に挙げる火山では、火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

アトサヌプリ［噴火予報（噴火警戒レベル１、活火山であることに留意）］
大雪山［噴火予報（活火山であることに留意）］
倶多楽［噴火予報（噴火警戒レベル１、活火山であることに留意）］
有珠山［噴火予報（噴火警戒レベル１、活火山であることに留意）］
北海道駒ヶ岳［噴火予報（噴火警戒レベル１、活火山であることに留意）］
恵山［噴火予報（噴火警戒レベル１、活火山であることに留意）］

【東北地方】

秋田駒ヶ岳［噴火予報（噴火警戒レベル１、活火山であることに留意）］

28 日 07 時から 08 時にかけて火山性地震が一時的に増加し、21 回観測した。日別地震回数が 10 回を超えたのは 2016 年 10 月 19 日（14 回）以来である。その他の観測データには、この地震活動に伴う特段の変化はみられなかった。

震源は、男女岳の北西約１km 付近の深さ約２～３km で、最大規模の地震は 07 時 09 分の地震でマグニチュード 1.1 であった。

そのほかの期間は、火山性地震は少ない状態で経過した。火山性微動は観測されなかった。

女岳の山頂付近では、地熱域が引き続き確認されている。

地震活動は低調で、地殻変動及び噴気活動にも変化はみられないが、地熱活動が続いているので今後の火山活動の推移に注意が必要である。

蔵王山［噴火予報（噴火警戒レベル１、活火山であることに留意）］

火山活動に特段の変化はなかった。蔵王山では、2013 年から 2015 年にかけて火山活動の高まりがみられた。その後も火山性地震や火山性微動が時々発生していることから、今後の火山活動の推移に注意が必要である。

吾妻山［噴火予報（噴火警戒レベル１、活火山であることに留意）］

大穴火口付近での熱活動は継続しているので、今後の火山活動の推移に注意が必要である。

入山する際には、火山ガスに注意が必要である。また、大穴火口付近で噴出現象が突発的に発生する可能性があることに留意が必要である。

なお、以下に挙げる火山では、火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

岩木山［噴火予報（噴火警戒レベル１、活火山であることに留意）］
八甲田山［噴火予報（活火山であることに留意）］
十和田［噴火予報（活火山であることに留意）］
秋田焼山［噴火予報（噴火警戒レベル１、活火山であることに留意）］
岩手山［噴火予報（噴火警戒レベル１、活火山であることに留意）］
鳥海山［噴火予報（活火山であることに留意）］
栗駒山［噴火予報（活火山であることに留意）］
安達太良山［噴火予報（噴火警戒レベル１、活火山であることに留意）］
磐梯山［噴火予報（噴火警戒レベル１、活火山であ

ることに留意）]

【関東・中部地方及び伊豆・小笠原諸島】

草津白根山（くさつしらねさん）［火口周辺警報（噴火警戒レベル２、火口周辺規制）］

奥山田監視カメラ（湯釜の北約 1.5km）による観測では、引き続き湯釜北側噴気地帯の噴気孔から噴気が認められた。湯釜からの噴気は認められなかった。東京工業大学の監視カメラ（湯釜火口内）では、火口内に噴気は認められず、その他の状況にも特段の変化は認められなかった。

2016 年９月の現地調査で湯釜火口の内壁の一部地熱域に温度の上昇傾向が認められていたが、18 日に実施した現地調査では、前回（2017 年４月）の調査に引き続、地熱域の温度や広がりに大きな変化は認められなかった。2008 年から熱活動が始まった湯釜火口内及び北側外斜面の地熱域に拡大傾向は認められていない。

東京工業大学によると、2014 年以降、湯釜の湖水に含まれる高温の火山ガス由来の成分の濃度上昇が続き、火山活動が活発な状態であることを示していたが、2016 年半ばには、濃度の上昇傾向は止まり、2017 年に入って、減少傾向がみられ始めている。全磁力観測では、2014 年５月以降の湯釜近傍地下の温度上昇を示唆する変化は、2014 年７月以降停滞していたが、2016 年夏頃から温度低下を示す変化に転じている。

15 日から 17 日にかけて実施した GNSS 繰り返し観測では、前回（2016 年９月 27～30 日）に引き続き湯釜付近の収縮傾向が認められた。

火山活動には、静穏化の傾向がみられ始めたものの、引き続き、小噴火が発生する可能性がある。湯釜火口から概ね１km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石[3]に警戒が必要である。噴火時には、風下側で火山灰や小さな噴石[3]が風に流されて降るおそれがあるため注意が必要である。

また、ところどころで火山ガスの噴出がみられ、周辺のくぼ地や谷地形などでは滞留した火山ガスが高濃度になることがあるので、注意が必要である。

浅間山（あさまやま）［火口周辺警報（噴火警戒レベル２、火口周辺規制）］

火山活動はやや活発な状態で経過している。

山頂火口からの白色の噴煙は火口縁上概ね 600m以下で経過している。山頂火口では、2016 年 12 月末頃から夜間に高感度の監視カメラで確認できる程度の微弱な火映[4]が時々観測されている。

今期間実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量[5]は１日あたり 500～1,400 トン（４月：600～1,500 トン）と多い状態が継続している。

山頂火口直下のごく浅い所を震源とする体に感じない火山性地震が、９日に 80 回発生するなどやや多い状態で経過した。

2015 年６月上旬頃から 12 月にかけて、山頂の南南西にある塩野山の傾斜計[6]でみられていた北または北西上がりの緩やかな変化が、2016 年 12 月頃から再びみられている。国土地理院の GNSS[7]連続観測によると、浅間山を南北に挟む基線で 2016 年秋頃からみられていた小さな伸びはほぼ停止している。

今後も火口周辺に影響を及ぼす小規模な噴火が発生する可能性があるので、山頂火口から概ね２km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒が必要である。また、風下側では降灰及び風の影響を受ける小さな噴石に注意が必要である。

新潟焼山（にいがたやけやま）［噴火予報（噴火警戒レベル１、活火山であることに留意）］

山頂部東側斜面の噴煙高度は、2016 年秋から低下傾向がみられるものの、2015 年夏以前と比べて引き続きやや高い状態である。

GNSS 連続観測では、2016 年１月頃から新潟焼山を南北に挟む基線で伸びがみられていたが、2016 年夏以降は停滞傾向が認められる。

2016 年５月１日から増加した振幅の小さな火山性地震は次第に減少し、少ない状態となっているものの、静穏だった 2014 年以前と比べるとやや多い状態となっている。

今後の火山活動の推移に引き続き注意が必要である。

弥陀ヶ原（みだがはら）［噴火予報（活火山であることに留意）］

監視カメラによる観測では、地獄谷からの噴気の高さは、概ね 200m以下で経過した。

弥陀ヶ原近傍の地震は少ない状態で経過した。

立山地獄谷では熱活動が活発な状態が続いている。2012 年６月以降の観測で噴気の拡大・活発化や温度の上昇傾向が確認されているので、今後の火山活動の推移に注意が必要である。また、この付近では火山ガスに注意が必要である。

御嶽山（おんたけさん）［火口周辺警報（噴火警戒レベル２、火口周辺規制）］

監視カメラによる観測では、噴煙の高さは概ね 500m以下で経過しており、噴煙活動に変化はない。

山頂直下付近の地震活動は、回数は少ないながらも継続している。火山性微動は観測されな

かった。
火口列からの噴煙活動や地震活動が続いていることから、今後も小規模な噴火が発生する可能性がある。
火口から概ね１㎞の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒が必要である。風下側では降灰及び風の影響を受ける小さな噴石に注意が必要である。

箱根山（はこねやま）［噴火予報（噴火警戒レベル１、活火山であることに留意）］

大涌谷監視カメラによる観測では、大涌谷の火口や噴気孔及び温泉供給施設から引き続き噴気が勢いよく噴出している。宮城野監視カメラ（大涌谷の東北東約３㎞）及び小塚山北東監視カメラ（大涌谷の北北東約３㎞）による観測では、大涌谷の噴気の高さは、概ね 400ｍ以下で経過しており、状況に変化はない。
火山性地震の発生回数は少なく、地震活動は低調に経過している。また、地殻変動観測では、特段の変化はみられていない。
一方、大涌谷周辺の想定火口域では、噴気活動が活発なところがある。大涌谷周辺の想定火口域では、噴気や火山ガスに引き続き注意が必要である。

伊豆大島（いずおおしま）［噴火予報（噴火警戒レベル１、活火山であることに留意）］

17 日に実施した現地調査では、三原山山頂火口内及びその周辺で噴気が引き続き確認された。中央火孔内では、ごく弱い噴気が認められた。その他、三原山山頂周辺の噴気温度に特段の変化は認められなかった。
火山性地震はやや多い状態で経過している。震源は、三原山周辺の浅いところと西方沖、島の東部に分布している。
地殻変動観測によると、短期的な膨張と収縮を繰り返しながら、長期的には地下深部へのマグマ供給によると考えられる島全体の膨張傾向が続いている。

三宅島（みやけじま）［噴火予報（噴火警戒レベル１、活火山であることに留意）］

山頂火口からの噴煙の高さは、概ね 100ｍ以下で経過した。
22 日及び 30 日に実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は１日あたり数十トン以下であった（前回４月 14 日：数十トン以下）。
19 日に実施した現地調査では、主火孔内及びその周辺で引き続き高温領域が認められ、前月（４月 14 日、21 日）や前年の同じ時期（2016 年５月 21 日）の観測と比べて、火口内の地形及び噴気の分布に特段の変化は認められなかった。
火山性地震は少ない状態で経過している。震源は山頂火口直下に分布しており、これまでと比べて特段の変化は認められない。火山性微動は観測されなかった。
主火孔における噴煙活動が継続していることから、火口内では噴出現象が突発的に発生する可能性があるので、山頂火口内[8)]及び主火孔から 500ｍ以内では火山灰噴出に警戒が必要である。また、火山ガスの放出がわずかながら継続していることから、風下にあたる地域では火山ガスに注意が必要である。

ベヨネース列岩（れつがん）［噴火警報（周辺海域警戒）及び火山現象に関する海上警報］

海上保安庁が２日及び８日に上空からの観測を実施した。２日の観測では、明神礁付近の海水面に変色水と気泡が観測された。８日の観測では、明神礁付近の海水面に気泡が観測されたが、変色水は観測されなかった。
今後、小規模な海底噴火が発生する可能性があるため、明神礁付近及び周辺海域では海底噴火に警戒が必要である。また、周辺海域では海底噴火による浮遊物（軽石等）に注意が必要である。

西之島（にしのしま）［火口周辺警報（入山危険）及び火山現象に関する海上警報］

２日に海上保安庁が、24 日及び 25 日に第三管区海上保安本部が実施した上空からの観測では、島の中央部やや南に位置する火砕丘の山頂火口で噴火が断続的に発生し、大きな噴石の飛散と灰色～灰白色の噴煙が確認された。
溶岩流の流出は継続しており、島の南西岸で海に流れ込んで先端から白色噴気が発生していた。溶岩流先端部周辺には茶褐色～黄緑色の変色水域が分布していた。
気象衛星ひまわりの観測によると、引き続き西之島付近で周囲に比べて地表面温度の高い領域を確認している。
今後も噴火が継続する可能性があるので、火口から概ね 1.5㎞ の範囲では噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒が必要である。

硫黄島（いおうとう）［火口周辺警報（火口周辺危険）及び火山現象に関する海上警報］

火山性地震は、やや少ない状態で経過している。火山性微動は観測されていない。
阿蘇台東監視カメラ（阿蘇台陥没孔の東北東約 900ｍ）による観測では、島西部の阿蘇台陥没孔からの噴気の高さは概ね 100ｍ以下で経過

した。また、島北西部の井戸ヶ浜からの噴気は認められなかった。

GNSS 連続観測によると、地殻変動は隆起及び停滞を繰り返している。

硫黄島の島内は全体に地温が高く、多くの噴気地帯や噴気孔があり、過去には各所で小規模な噴火が発生している。火山活動はやや活発な状態で推移しており、火口周辺に影響を及ぼす噴火が発生すると予想されるので、従来から小規模な噴火が発生した地点（ミリオンダラーホール（旧噴火口）等）及びその周辺では噴火に警戒が必要である。

福徳岡ノ場（ふくとくおかのば）［噴火警報（周辺海域警戒）及び火山現象に関する海上警報］

海上保安庁、第三管区海上保安本部、海上自衛隊及び気象庁によるこれまでの観測によると、福徳岡ノ場付近の海面には長期にわたり火山活動によるとみられる変色水等が確認されている。

今後も小規模な海底噴火が発生すると予想されるので、周辺海域では海底噴火に警戒が必要である。また、周辺海域では海底噴火による浮遊物（軽石等）に注意が必要である。

なお、以下に挙げる火山では、火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

那須岳（なすだけ）［噴火予報（噴火警戒レベル１、活火山であることに留意）］
日光白根山（にっこうしらねさん）［噴火予報（噴火警戒レベル１、活火山であることに留意）］
焼岳（やけだけ）［噴火予報（噴火警戒レベル１、活火山であることに留意）］
乗鞍岳（のりくらだけ）［噴火予報（活火山であることに留意）］
白山（はくさん）［噴火予報（噴火警戒レベル１、活火山であることに留意）］
富士山（ふじさん）［噴火予報（噴火警戒レベル１、活火山であることに留意）］
伊豆東部火山群（いずとうぶかざんぐん）［噴火予報（噴火警戒レベル１、活火山であることに留意）］
新島（にいじま）［噴火予報（活火山であることに留意）］
神津島（こうづしま）［噴火予報（活火山であることに留意）］
八丈島（はちじょうじま）［噴火予報（活火山であることに留意）］
青ヶ島（あおがしま）［噴火予報（活火山であることに留意）］

【九州地方及び南西諸島】

九重山（くじゅうさん）［噴火予報（噴火警戒レベル１、活火山であることに留意）］

火山活動に特段の変化はなく、噴火の兆候は認められないが、GNSS 連続観測によると、一部の基線で伸びの傾向が認められるので、今後の火山活動の推移に留意が必要である。

阿蘇山（あそさん）［噴火予報（噴火警戒レベル１、活火山であることに留意）］

中岳第一火口では、噴火は発生していない。

期間中に実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、１日あたり 700～1,700 トンと増減を繰り返しながら、やや多い状態で経過した（４月：700～1,700 トン）。

また、孤立型微動[9]は、４月 27 日から増加し、４月 29 日には 778 回を観測するなど多い状態となったが、その後は次第に減少し、４日以降は少ない状態で経過した。

期間中に実施した現地調査では、中岳第一火口内で緑色の湯だまり[10]を確認した。湯だまり量は、中岳第一火口底の 10 割と前月（４月：10 割）から変化はなかった。土砂噴出は観測されていない。また、中岳第一火口底南西側及び南側火口壁では、白色の噴気が勢いよく噴出しているのを確認した。

赤外熱映像装置による観測では、湯だまりの表面温度は、43～54℃と前月（４月：46～48℃）と比べて特段の変化は認められなかった。また、南側火口壁の一部で熱異常域（最高温度：約 560～600℃）を確認した。前月（４月：最高温度 約 630℃）と比べて最高温度はやや低下したが、引き続き高い状態であった。熱異常域の分布に特段の変化は認められなかった。

傾斜計では火山活動に伴う特段の変化は認められない。また、GNSS 連続観測では、2016 年７月頃から認められていた、草千里深部にあると考えられているマグマだまりの膨張を示す基線の伸びは、2016 年 11 月中旬以降は停滞している。

火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は認められないが、火口内では土砂や火山灰が噴出する可能性がある。また、火口付近では火山ガスに注意が必要である。

雲仙岳（うんぜんだけ）［噴火予報（噴火警戒レベル１、活火山であることに留意）］

火山活動に特段の変化はないが、長期的には 2010 年頃から火山性地震の活動がやや活発となっているので、今後の火山活動の推移に留意が必要である。

霧島山（きりしまやま）（えびの高原（硫黄山）（えびのこうげん（いおうやま））周辺（しゅうへん））［火口周辺警報（噴火警戒レベル２、火口周辺規制）］←９日に噴火警戒レベルを１（活火山であることに留意）から２（火口周辺規制）に引上げ

えびの高原（硫黄山）周辺では、2015 年 12

月頃から長期的に熱異常域の拡大や噴気の量の増加が認められている。こうした中で、2017 年４月 25 日 11 時頃から硫黄山南西観測点の傾斜計で、硫黄山付近が隆起する傾斜変動がみられている。また、東京大学地震研究所が５月８日に実施した現地調査により、硫黄山火口内で泥状の噴出物が確認された。

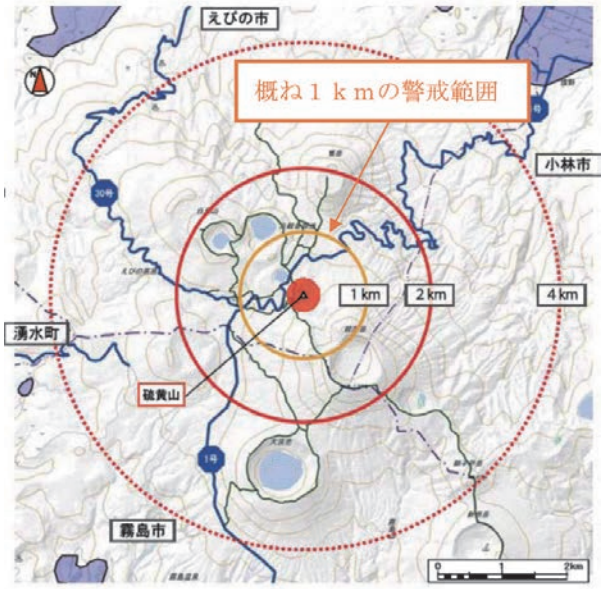
このように、えびの高原（硫黄山）周辺では、火山活動が高まっており、今後、小規模な噴火が発生するおそれがあると判断したことから、５月９日 19 時 20 分に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを１（活火山であることに留意）から２（火口周辺規制）に引き上げた。

硫黄山火口周辺では、４月中旬以降に火口南側で確認されている顕著な噴気孔は次第に噴気量が増加し、５月中も大きな噴気音を伴うなど活発な噴気活動が続いている。噴気の高さは最高で稜線上 100ｍであった。

赤外熱映像装置による観測では、引き続き熱異常域が認められた。11 日に実施した現地調査では、硫黄山火口周辺で熱異常域が拡大しているのを確認した。また、硫黄山の西斜面の一部で新たな熱異常域が確認された。

15 日及び 16 日に実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量が両日とも１日あたり 10 トンで、2015 年 12 月に噴気が確認されて以降の活動で初めて観測された。19 日及び 22 日の現地調査では１日あたり 10 トン未満であった。

えびの高原の硫黄山から概ね１㎞の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒が必要である。風下側では、降灰及び風の影響を受ける小さな噴石（火山れき [11]）に注意が必要である。



霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺）　警戒が必要な範囲（硫黄山から概ね１㎞の範囲）

霧島山（新燃岳）［噴火予報（噴火警戒レベル１、活火山であることに留意）］←26 日に噴火警戒レベルを２（火口周辺規制）から１（活火山であることに留意）に引下げ

新燃岳では、2011 年９月７日を最後に噴火は発生していない。火口内に蓄積した溶岩のわずかな膨張は、2016 年夏頃から停滞している。2016 年 10 月以降に火口付近で繰り返し行った現地調査でも、火口内及び周辺の噴気や熱異常域の状況に変化はみられなかった。また、火口近傍の傾斜計による地殻変動観測、地震活動等その他の観測データにも特段の活動の高まりを示す変化はみられていない。

これらのことから、５月 26 日 14 時 00 分に噴火予報を発表し、噴火警戒レベルを２（火口周辺規制）から１（活火山であることに留意）へ引き下げた。

監視カメラによる観測では、2016 年 11 月以降、火口縁を越える噴煙は認められなかった。西側斜面の割れ目付近で、時々、噴気が上がっていることを確認した。11 日に韓国岳山頂から実施した赤外熱映像装置による観測では、火口内及び西側斜面の割れ目付近で、引き続きやや温度の高い部分が観測されたが、熱異常域の分布に特段の変化は認められなかった。

活火山であることから、火口内及び西側斜面の割れ目付近では、火山灰や火山ガス等の規模の小さな噴出現象が突発的に発生する可能性があるので注意が必要である。

桜島［火口周辺警報（噴火警戒レベル３、入山規制）］

桜島の噴火活動は、活発な状態で経過した。

昭和火口では、噴火が 47 回（４月：19 回）発生し、このうち爆発的噴火 [12] は９回であった。２日 03 時 20 分の噴火では、多量の噴煙が火口縁上 4,000ｍまで上がり、同日に実施した現地調査及び電話による聞き取り調査では、桜島の西側から北西側の鹿児島市から日置市及び、いちき串木野市にかけて降灰を確認した。17 日、23 日、25 日の噴火では噴石が５合目まで達した。

南岳山頂火口では、噴火が２回（４月：２回）発生した。５日 12 時 13 分の噴火では、噴煙が火口縁上 2,500ｍまで上がり雲に入った。爆発的噴火は発生しなかった。

２日、５日及び 25 日の夜間に高感度の監視カメラで確認できる程度の微弱な火映が観測された。火映が観測されたのは、2015 年９月 16 日以来である。

16 日に実施した赤外熱映像装置による観測では、桜島の北西側斜面及び北側斜面で、これまでと同様に熱異常域は観測されなかった。

８日及び 17 日に実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は１日あたり 300～1,700 トン（４月：300～500 トン）とやや増加した。

火山性地震の月回数は 192 回（４月：647 回）と少ない状態で経過した。

火山性微動の継続時間は、月合計 130 時間０分（４月：４時間１分）で、噴火に伴う微動が増加した。

桜島島内の傾斜計及び伸縮計[13]で、ごく小規模以上の噴火の内、一部の噴火時に噴火前のわずかな山体の隆起（伸び）と噴火後のわずかな沈降（縮み）が観測された。

GNSS 連続観測では、姶良カルデラ（鹿児島湾奥部）の地下深部の膨張が続いている。

姶良カルデラの地下のマグマだまりが引き続き膨張する傾向がみられており、今後も噴火活動が継続すると考えられる。

昭和火口及び南岳山頂火口から概ね２km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流[14]に警戒が必要である。

風下側では火山灰だけでなく小さな噴石（火山れき[11]）が遠方まで風に流されて降るため注意が必要である。爆発的噴火に伴う大きな空振によって窓ガラスが割れるなどのおそれがあるため注意が必要である。また、降雨時には土石流に注意が必要である。

薩摩硫黄島（さつまいおうじま）［噴火予報（噴火警戒レベル１、活火山であることに留意）］

火山活動に特段の変化はないが、硫黄岳山頂火口では噴煙活動が続いているので、火山灰等が噴出する可能性がある。また、火口付近では火山ガスに注意が必要である。

口永良部島（くちのえらぶじま）［火口周辺警報（噴火警戒レベル３、入山規制）］

口永良部島の新岳では、2015 年６月 19 日のごく小規模な噴火後、噴火は観測されていない。

白色の噴煙は最高で火口縁上 700m（４月：300m）まで上がった。

10 日に実施した現地調査では、これまでの観測と同様に新岳火口および新岳火口西側割れ目付近から白色の噴煙が上がっており、火口周辺の地形や噴気等の状況に変化は認められなかった。また、赤外熱映像装置による観測では、新岳火口の西側割れ目付近の熱異常域の温度は低下した状態が続いており特段の変化は認められなかった。

東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は１日あたり 100～500 トン（４月：100～300 トン）と 2014 年８月の噴火前（１日あたり概ね 100 トン以下）よりもやや多い状態で経過した。

火山性地震の月回数は 36 回（４月：46 回）と少ない状況で経過した。火山性微動は 2016 年９月以降、観測されていない。

GNSS 連続観測では、火山活動によると考えられる特段の変化は認められなかった。

新岳火口から概ね２km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒が必要である。向江浜地区から新岳の南西にかけての火口から海岸までの範囲では、火砕流に警戒が必要である。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が風に流されて降るおそれがあるため注意が必要である。降雨時には土石流の可能性があるため注意が必要である。

諏訪之瀬島（すわのせじま）［火口周辺警報（噴火警戒レベル２、火口周辺規制）］

御岳（おたけ）火口では、噴火が時々発生し、そのうち爆発的噴火[12]は２回（４月：なし）であった。

噴火に伴う噴煙は、最高で火口縁上1,900m（４月：1,200m）まで上がった。

同火口では、時々夜間に高感度の監視カメラで火映が観測された。

今後も火口周辺に影響を及ぼす程度の噴火が発生すると予想されるので、火口から概ね１km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒が必要である。風下側では火山灰だけでなく小さな噴石が風に流されて降るおそれがあるため注意が必要である。

なお、以下に挙げる火山では、火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

鶴見岳（つるみだけ）・伽藍岳（がらんだけ）［噴火予報（噴火警戒レベル１、活火山であることに留意）］

霧島山（きりしまやま）（御鉢（おはち））［噴火予報（噴火警戒レベル１、活火山であることに留意）］

１） 火山体の南側で全磁力を観測した場合、全磁力値が減少すると火山体内部で温度上昇が、全磁力値が増加すると火山体内部で温度低下が生じていると推定される。
２） 赤外熱映像装置による。赤外熱映像装置は物体が放射する赤外線を感知して温度分布を測定する測器である。熱源から離れた場所から測定することができる利点があるが、測定距離や大気等の影響で実際の熱源の温度よりも低く測定される場合がある。
３） 噴石については、大きさによる風の影響の程度の違いによって飛散範囲が大きく異なる。本文中「大きな噴石」とは、「風の影響を受けず弾道を描いて飛散する大きな噴石」のことであり、「小さな噴石」とは、それより小さく「風に流されて降る小さな噴石」のことである。
４） 赤熱した溶岩や高温の火山ガス等が、噴煙や雲に映って明るく見える現象。
５） 火口から放出される火山ガスには、マグマに溶けていた水蒸気や二酸化硫黄、硫化水素など様々な成分が含まれており、これらのうち、二酸化硫黄はマグマが浅部へ上昇するとその放出量が増加する。気象庁では、二酸化硫黄の放出量を観測し、火山活動の評価に活用している。
６） 火山活動による山体の傾きを精密に観測する機器。火山体直下へのマグマの貫入等により変化が観測されることがある。
７） GNSS（Global Navigation Satellite Systems）とは、GPS をはじめとする衛星測位システム全般を示す呼称である。
８） 山頂火口内とは、雄山山頂にある火口及び火口縁から海岸方向に約 100ｍまでの範囲を指す。
９） 阿蘇山特有の微動で、火口直下のごく浅い場所で発生しており、周期 0.5～1.0 秒、継続時間 10 秒程度で、中岳西山腹観測点の南北動の振幅が５μm/s 以上のものを孤立型微動としている。
10） 活動静穏期の中岳第一火口には、地下水などを起源とする約 40～60℃の緑色の湯がたまっており、これを湯だまりと呼んでいる。火山活動が活発化するにつれ、湯だまり温度が上昇・噴湯して湯量の減少や濁りがみられ、その過程で土砂を噴き上げる土砂噴出現象等が起こり始めることが知られている。
11） 霧島山・桜島では「火山れき」の用語が地元で定着していると考えられることから、付加表現している。
12） 桜島では、火道内の爆発による地震を伴い、爆発音、体に感じる空気の振動、噴石の火口外への飛散、または、気象台や島内の観測点で一定基準以上の空気の振動のいずれかを観測した噴火を爆発的噴火としている。諏訪之瀬島では、島内の観測点で一定基準以上の空気の振動を観測した噴火を爆発的噴火としている。
13） 火山活動による地殻の伸び縮みを観測する機器。マグマ溜まりや火道内の圧力増加によって生じる火口周辺の変化が観測されることがある。
14） 火砕流とは、火山灰や岩塊、火山ガスや空気が一体となって急速に山体を流下する現象である。火砕流の速度は時速数十 km から時速百 km 以上、温度は数百℃にも達することがある。